

【自己研鑽メニュー】

(各回定員：数名程度)

No.	共通課題のテーマ	時期の目安	受入日数の目安
1	マルチ比較試験 地温の調節や雑草の抑制などのため作物の株元をマルチシートや藁などで覆い土壌環境を整えます。異なるマルチ資材がトマトの生育・収量に及ぼす影響を評価します。	4月～7月	うち2日間程度
2	株間試験 ニンジンの株間を変えて栽培し、根重、サイズ、収量、収益に及ぼす影響を調査します。収穫したニンジンを選果、調製して卸売市場に出荷します。	4月～7月	うち2日間程度
3	経営分析（損益分岐点分析） カボチャを用いて生産に係わる資材、労賃などを記録します。また、収穫したカボチャを選果、調製して卸売市場に出荷します。粗収益から生産コストを差し引いて、純収益と損益分岐点を計算します。	4月～7月	うち2日間程度
4	品種比較 メロンを用いて、異なる品種の収量、食味を比較します。生産者として、または消費者として、討議を通じてベストな品種を選定します。	4月～7月	うち3日間程度
5	養分欠乏観察 植物に特定の養分が不足することで現れる症状を、水耕養液を用いて観察します。トマトとオクラの欠乏症状を観察します。	4月～5月	うち3日間程度
6	接木実習 土壌伝染性病害を防ぐため台木と穂木を接ぎ合わせ栄養的に共存した新しい植物体を作り出します。トマトやスイカを用いた接木技術を習得します。	4月上・中旬	うち1日間程度
7	土壌消毒試験 土壌伝染性病害を防除するため、太陽熱処理や農薬などの効果を比較します。処理後に播種して、健全株が生育した割合から、その効果を評価します。	5月下旬～7月下旬	うち2日間程度
8	育苗培土試験 心土に異なる有機資材を混合し、育苗に適した培土の特性を学びます。特に、培土の物理性や化学性が苗の生育に及ぼす影響を評価します。	3月下旬～6月上旬	うち3日間程度
9	堆肥・ぼかし作成実習 堆肥は稲わらや家畜のふん尿などの有機物を微生物の力で分解・発酵させたもの、ぼかしは米ぬかや油かすなどの有機肥料に土や穀殻を加えて発酵させたもので作成します。	4月中・下旬	各1日間程度
10	燐炭作成実習 もみ殻を蒸し焼きにして炭化させて作成します。作成した燐炭は土壌改良剤として利用します。	4月上旬	1日間
11	太陽熱消毒実習 太陽光を利用して土壌の地温を上昇させ、土壌中の病害虫や雑草の種子などを防除する土壌消毒方法です。小規模圃場で実習し、太陽熱処理期間中（約2週間）の地温をモニタリングします。	6月下旬～7月下旬	うち1日間程度
12	花芽検鏡 トマト苗を用いて、定植前に花芽が形成されているかを顕微鏡下で確認し、定植時期や出蕾・開花・収穫の時期を予想します。また、「苗半作」といわれるように、苗の質が収量に与える影響について考えます。	4月下旬	1日間
13	練床作成実習 育苗用ポットなどを用いずに、心土と堆肥を容積比およそ1：1で混合して、枠の中に均一に入れ、適度に水を加えて平らに押さえ、ソイル・ブロックを作ります。ブロック上に生育した苗をそのまま定植します。	6月中旬～7月下旬	うち1日間程度
14	鮮度保持試験 チャコールクーラー（木炭冷蔵庫）を使い、トマト果実の鮮度・品質の劣化をどのくらい遅くすることができるのかを調べます。収穫後およそ1週間の果実重量、果色の変化を記録します。	7月下旬～8月上旬	うち3日間程度

(2024.11)